

蓮如と真宗教団

——「キリシタン文書」によりながら——

木 越 康

宗教思想と教団

新しい宗教思想や信仰が、同一信心を持つ者の集まりを生み、やがてそれが組織として整備され、教団化するということは、社会学者からするならば、当然のこととして指摘されるものである。しかし、純粹に思想としての宗教を考へる場合、教団が形成されるということは、その宗教思想にとってマイナスであると捉えられることが多くあるようである。

イエスは神の国を予告したが、到来したのは教会であった。^①

A・ロワジー(1857～1940)による、この教会の存在自体に対する問題提起は、その後大きな衝撃をキリスト教世界に与えることになった。キリスト教における教会存在の問題と、真宗における教団存在の問題とを単純に同一視することはできない。しかし、真宗における教団存在を考へる場合、同一の論旨での批判が向けられることが多くあるように思われる。つまり、親鸞の課題は、浄土真実の開顕であって、「教団の設立」ではなかったということである。このような見方からくる真宗の教団理解は、「教団」とは、単なる歴史的副産物であって、親鸞思想における本質で

はないというものである。

服部之繪は、『蓮如』において、親鸞の原始教団から後の真宗教団への展開は「物質的存在が教義を自由に修正する」^②出来事であるという了解を示した。そしてさらに、職業的宗教家を持つような教団の存在は、決して親鸞の思想と直結するものではないと指摘している。また山折哲雄は『人間蓮如』において、次のように述べている。

親鸞の思想は知的エリート思想であるが、その思想が大衆化される時、いろいろな解釈の洗礼を受け、ときに誤解や曲解まで受けたということだ。そもそも思想の大衆化というのは、その思想の単純化という結果を生む。そして思想の単純化はそこに必ずや誤解と改変の爪あとを含むであろう。^③

これは親鸞の果たした仕事に対して、蓮如の真宗再興の仕事を評価する際に語られるものである。親鸞の思想が「知的エリート思想」であったのか。あるいは「思想の大衆化」は「思想の単純化」であるのかなどについて、山折の主張には様々検討すべき点がある。しかし、本論が特に取り上げたいのは、蓮如の果たした真宗教団の再興は、これらに指摘されるように、親鸞思想とは直結するものではなく、さらには思想の誤解と改変であったのかということである。

教団化が宗教思想の改変であり誤解であるとみなされる時、真宗においてその教団の強大化に絶大な影響を与えた蓮如は、親鸞思想を誤解し改変させる人物として指摘されることになる。先の服部も山折も、基本的にはそのような見方で、蓮如について語っている。しかし本当に教団化とは、思想の改変であるのであろうか。そもそも宗教思想と教団は、直結することが不可能な関係にあるのであろうか。本論文ではこのことに念頭を起きながら、蓮如と教団の関係、その思想と教団の関係について尋ねていきたいと思う。

その際本論では、一つの史料から、これらの関係について尋ねていきたいと考えている。それは十六世紀から十七世紀にかけて書かれた、キリスト教宣教師達による日本報告書、「キリシタン文書」である。蓮如と真宗教団の関係

については、これまで『御文』や『御一代記聞書』等の史料を通して尋ねられてきた。確かにそれも、両者の関係を探る上で、貴重な研究であると考えられる。しかし、これら蓮如の行実に関わる直接の史料によっては、蓮如の教えが、どのように人々の中に浸透し、教団の中に影響を与えていったのかについては、それほど明確にすることは期待できないものと思われる。『御文』や『御一代記聞書』は、蓮如その人が語った言葉であったり、それに近い人物による、蓮如の行実の記述である。これらは、蓮如自身の思想を明らかにするものではあるが、その思想が、どのように教団へと直結していったのかは明確にはならないものと考えられる。

本論で注目しようとする「キリシタン文書」は、キリスト教宣教師達による蓮如没後五十年頃からの日本報告文書群である。この文書が、教団内からの発言ではないということ、そして蓮如没後の記事であることは、かえって重要な意味があるものと思われる。蓮如の思想がどのように教団内に定着し、どのような信仰者を生み出していったのかについては、蓮如没後の教団を、しかも第三者の眼から見ることが、より有効であると思われるからである。そこで本論では、このキリシタン文書によって、蓮如没後五十年当時からおよそ百年間の一向宗の様子をうかがいながら、宗教思想と教団の間係について、尋ねていきたいと思う。

キリシタン文書に見る一向宗

「キリシタン文書」とは、日本に訪れたキリシタン宣教師たちの報告文書群である。一五四九年にイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルがはじめて来日してからおよそ一世紀の間を「キリシタンの世紀」と呼ぶが、その間ヨーロッパに向けて出された報告が「キリシタン文書」である。ザビエルによって日本にはじめてキリスト教が伝来してからわずか百年にも満たない期間に、延べにして七六万人を越える人々がキリシタンへと改宗したと言われている。この数字がどれほど正確であるかについては、さらに検討が必要であると思われる。しかし、現在のカトリック

信者が五十万人に届かないことを考えれば、これは驚くべき数である。その改宗を主に進めたのが、ザビエルも所属した、イエズス会である。イエズス会は、カトリック教会の信仰回復を目指した、いわばカトリック内宗教改革派で、その目的は異端の根絶と異教徒の回心にあった。それはローマ教皇の最高主権を全世界に確立するという願いに支えられるものであった。それらが日本へ訪れ、活動を進める中で書き記したのが、ここで扱う「キリシタン文書」である。

これらは基本的には、日本においてどのようにキリスト教への改宗が進んでいるのかという状況を、ヨーロッパに向けて報告するものである。日本における宣教活動の成果を伝えるという性格上、かなり誇張された報告がなされるという面もある。しかしこれは、当時の日本の状況を詳細に伝える貴重な資料であると考えられている。

本論で主に使用する「キリシタン文書」は、東本願寺真宗海外史料研究班による「キリシタンから見た真宗」所収の史料集である。この史料集は、膨大なキリシタン文書群の中でも、すでに日本語訳されているものの中から、特に真宗に関する記事を集めたものである。日本語訳であることから来る限界や、収集範囲の問題など、多くの課題も残される史料集であるが、当時の真宗の様子が一目でできる、非常に貴重な研究成果であると思われる。それらによって、蓮如没後五十年からおよそ百年間の一向宗の様子が、詳細に知ることができるのである。本論も、同研究班との共同研究を通して得られた成果である。

有能な日本人と無知な一向宗

日本に訪れたイエズス会宣教師達の、日本人に対する第一印象は、次のようであったと報告されている。

第一に、私たちが交際することによって知りえた限りでは、この国の人びとは、今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。^④

国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きすることを覚える。^⑤

イエズス会士達の布教活動は、もちろん世界を視野に入れるものであった。その活動は航海術の発達にもなう大航海時代の幕開けともあいまって、未開の諸国へと展開されていったが、各地方で受けた先住民に対する印象よりも、日本国民の印象は、かなりよいものとして報告されている。このような日本の状況は、宣教師たちにとつては好都合であると考えられていたようである。それは、キリスト教の教義を学習し理解していくのに、日本人の能力は十分耐え得るものであるとみなされたからである。

しかし、このような日本国民に対する好印象の中で、一向宗に関する報告は、随分違った表現がとられる記事が多く見られるのである。それは例えば、次のような表現である。

かの大坂の邪悪な宗派である一向宗は当地方においてデウスの教えが抱える最大の障害の一つであるが故に、願わくば我らの主（なるデウス）が右の通りになるよう計り給わんことを。^⑥

「願わくば我らの主が右の通りになるよう計り給わんことを。」とは、織田信長による大坂本願寺攻めが成功することを神に祈る宣教師達の言葉である。ここに一向宗が「邪悪な宗派」であり、「最大の敵」として伝えられている。このような表現は、ほかの多くのキリシタン文書に見ることができものである。

大坂の領主（顕如光佐）は、日本にある最も有害な宗派の首領であり^⑦

かつて大坂の街が、日本で極悪の宗派の一つ（である一向宗）の本山であったように^⑧

大坂の市と城は日本で最も憎悪すべき宗派の一つの根拠地であった^⑨

一向宗を形容する場合には、ほとんど定型句のような形で、同様の表現がとられている。問題は、優秀であると誉められる日本人の中にあつて、なぜ一向宗が、これほど劣悪な表現で伝えられているのかということである。

これにはさまざまな理由が考えられる。当時の状況と宣教師達の報告とを整理するならば、およそ次の三つの理由が挙げられるであろう。

(a) 石山本願寺を中心として、絶大なる権力を誇っていた当時の一向宗の状況。就中、阿弥陀仏であるかのように扱われ、巨万の富と権力とを手にしていた顕如に対する憎悪があつた。

(b) 農民・庶民の宗派とキリシタン文書に報告されるように、他の宗派とは異なつて、当時の階層としては決して高いとは見えない人々によつて構成されている教団であるとみなされていた。

(c) 一向宗徒が見せる信仰形態が、宣教師達に対して「邪悪」という印象を懐かせた。

(a) については、顕如の権力に驚き、彼に対して嫌悪感を露わにする宣教師達の報告が多く見られる。主にそれは、「大坂の領主」として君臨する顕如が、自分を「デウスのように崇めさせている」状況に対してであり、彼らにとつて顕如はまさに「悪魔の命」に従う存在として映っていたのである。

また、(b) については、宣教師達は、一向宗のことを「農民の宗派」「庶民」の教団と報告している。このような一向宗に対して、次のような評価がある。

これらの人びとは甚だ無知です。そして彼等のその無知と彼等が信じている誤謬のために、彼等を論破することは容易です。¹⁰⁾

これは初来日の二年後、一五五一年の書簡であり、一向宗に対する第一印象であつたと考えられる。このような評価は、例えば同じ書簡に見られる禪宗に対する次の報告とは、およそ違つた評価である。

これらの人びとは偉大な瞑想法です。この理由により、当地方へ来る予定のパードレ達は彼等をその誤謬から解

き放ち、また彼等を論破するために学識をそなえていることが必要です。^⑩

宣教師達の来日の最大の目的は、もちろん異教徒をキリスト教に改宗させることにあった。その目的を果たすためにさまざまな準備をして来日するのであるが、偉大な思想家である禪宗を論破するには相当の学識を備える必要があると忠告している。それに対して一向宗は、特別な教育を受けているとは見受けられない農民の集まりであり、無知の者の集まりであるから、論破しやすいと報告されるのである。禪宗は教義にも実践にもすぐれたものであり、一向宗は念仏だけを一心不乱に称え、阿弥陀仏たる頭如に救いを求める、その姿はまさに無知なる農民の集まりであると映ったであろう。

改宗しない一向宗

このように一向宗は、他の日本人や宗派の人々に対して、極めて劣った人の集団であるという表現で報告されているのであるが、その理由としてもう一つ考えられるのが、(C)として挙げたものである。それは、一向宗徒が見せる信仰形態が、彼らにすれば「邪悪」という印象を懐かせるものであったということである。最終的に宣教師達が一向宗を「最大の障害」と表現したのは、実はその一向宗を支える信仰の内容に深く関わるものであったとも考えられるのである。

来日当初は、確かに一向宗のことを、教育を受けていない無知な人間の集まりであると見なし、そうであるから論破し改宗させるのは容易であると報告している。改宗が容易であるという予測を立てた報告は、イエズス会初来日後二年を経過した一五五一年のものであった。しかしそれからおよそ五十年後、宣教師達も日本の状況を把握しはじめると、彼ら是一向宗について違った印象を持ち始めたようなのである。

来日後五十年を経た一五九九年の報告には、一向宗について次のようにある。

彼らには、一向宗のおかげで自由を得ている農民であるから、同宗から逃れることが困難である。¹²⁾

これは九州天草の志岐の様子を伝えたものである。志岐は、キリシタン文化も栄え、九州地方における宣教活動の拠点となる土地であった。しかしこは、キリシタン来訪以前は、一向宗徒が多く住む地でもあったのである。「彼らには一般には一向宗のおかげで自由を得ている農民であるから、同宗から逃れることが困難である」とは、一向宗徒が、なかなか自分の信仰を捨てないということを意味するものである。この「自由を得ている」とは、信仰的に自由であったのか、あるいは領主の支配下から比較的自由な生活を送っていたことを意味するのかが明確ではない。しかし一向宗徒は、キリシタン文化が栄えるこの地方においても、改宗の面で宣教師たちにとっては面倒な存在だったようなのである。「同宗から逃れる」とは、キリシタンの眼から見た状況であり、つまりは一向宗からキリスト教へと改宗することである。宣教師達にとって一向宗は頭如を頭とする悪魔の宗教であるから、一向宗からの改宗は、彼らにとってまさに悪魔の命から「逃れる」ことを意味する。ともかく来日当初に宣教師達もった印象、つまり容易に改宗させることができる一向宗という印象とは違い、ここには一向宗徒を改宗させるのは困難であると報告されるのである。

また、容易に改宗しない一向宗の様子について、高槻における次のような出来事も報告されている。

今基督教要義を授けつつある者三千人なるのみならず、信長部下の大身の一人（荒木村重）其配下のキリシタンの領主（高山右近）の居城に来りし時、先頃同所に於て大なる祝祭と洗礼を行ひしことを聞きいたれば、城主に對ひ我等の数を一層弘布せざるは何故なるかと尋ね、直に彼の署名して一向宗と称する宗派の徒一同にキリシタンとなることを命ずる一紙を与へたり。同宗徒の数は五万人を越ゆべしと云ふ。而して他の宗派の徒も亦基督教要義の説教を聴くことを強制せられたり。¹³⁾

ここに当時の高槻の領主であった高山右近が、一向宗徒に対して、キリシタンとなるように命令を下したというこ

とが伝えられている。キリシタンの信者が日本に急速に広まった背景には、実は、このような形式の改宗も多く見られる。宣教師たちの活動によって、一人一人改宗を決意していった信者もいるが、キリシタン大名等の意志によって、改宗させられた者も多いのである。キリシタン世紀の間に七十六万人を越える人々がキリシタンへと改宗したと言われる数字に検討が必要であると思われるのは、このような理由からである。

高槻では、一向宗だけで五万人いたと言われるが、領主のキリシタンへの改宗に伴って、領民は説教を聴くことを強要され、改宗を命じられるのである。宣教師たちにとっても、大名の改宗は、願ってもないことであつた。それは、一人を改宗させるのに伴って、何万という民衆が、一挙にキリシタンとなるからである。

ところが、この改宗からおよそ三十年後、一五八七年の同じく高槻の様子を伝える書簡には、次のようにある。

そのキリシタンたちは、右近殿が去つた後、そのほとんど全領地が、異教徒の主君や管理人に支配されるようになったので、甚大な損害を被るに至つた。そうした障害のために、当然のことながら、(司祭たちは)キリシタンたちの世話ができなかつたから、(彼らの間では)信仰の弱い者が続出し始めた。(とりわけ)かつて一向宗(の信徒)であつた人々が(キリシタン)信仰に動揺をきたしたのであるが、(ダミアン・マリン)師が到着したことによって彼らは強い信仰を取り戻し、ふたたびキリシタンの数は増加し、彼らが久しく待望していたように司祭がそこに定住することになって、一同は大いに喜び、かつ満足した^④。

キリシタン大名である右近が高槻を追われた後、その地のキリシタン信仰は動揺をきたすことになる。ここでは、そのなかでも、かつて一向宗徒であつた人びとが、とりわけキリシタン信仰に動揺をきたしたと記されている。ここで言われる一向宗徒とは、先に集団改宗したと言われる五万人の一向宗徒である。領主である右近は、書面でもって改宗を命じていたが、右近が去ると、最も早く一向宗徒が、一向宗としての信仰を露わにしたと言われるのである。

ここでも一五五一年に見られたような当初の宣教師達の印象、つまり容易に改宗させることができるという印象と

は違い、一向宗徒を改宗させるのは困難であることが報告されている。宣教師達が一向宗徒に対して持った「無知・誤謬」という印象が、文字通りの「無知・誤謬」であるならば、彼らが予想したように改宗は簡単に進んだものと思われる。しかしそれは進まなかった。なぜこのようなことが起こったのであろうか。無知であるはずの一向宗徒が、なぜ容易に改宗しなかったのであろうか。

それは無知であるとみなされていた一向宗が、実は宣教師達の予想に反して、深く信仰に支えられた教団であったからであると考えられる。さらに言えば、その「無知」であること自体、あるいは構成員が教育を受けているとは思えない「農民」や「庶民」であると映ったこと自体が、実は一向宗の信仰の本質に深く関わる事柄であったことによるものであると考えられるのである。

宣教師達が、一向宗を「最大の敵」であり「最も邪悪」と見る事情は、来日直後と、キリシタン世紀百年間の後半とは、かなり変わって来ているように思われる。つまり、彼らにとつて一向宗は、もはや無知であるから邪悪なのではなく、改宗しないから邪悪なのである。彼らにとつて一向宗は、農民庶民を中心とした程度の低い集団ではなく、実は堅く信仰を保つ、改宗させにくい教団としてあったのである。その堅い信仰の内実として、「農民」の教団であることや「無知」と指摘される事柄があったと考えられるのである。

一向宗の信仰

一向宗の信仰については、次のような報告がある。

此人は公に多数の妻を有し、又他の罪惡を犯せども、之を罪と認めず、之に対する崇敬甚しく、只彼を見るのみにて多く流涕し、彼等の罪の赦免を求む。^⑮

ここでは僧侶であるのに、公然と妻帯する顕如が述べられ、さらに妻帯しているにもかかわらず、一向宗の門弟た

ちが彼を崇敬する様子が語られている。また妻帯にとどまらず、さまざまな罪悪を犯すことがあっても、それを罪と認めて反省する様子がないことも驚きをもって報告されている。

当時一向宗において妻帯していたのは、何も顕如だけではなかったことも報告されている。他の一向宗の僧侶についても、次のように言われている。

一向宗の坊主は皆結婚せり。¹⁶

これらの状況は、宣教師達から見ると、まさに無秩序で邪悪な信仰としてみなされていたのである。これは、当時の一向宗以外の僧侶たちの状況とは、かなり異なった姿として映っていたと考えられる。

一向宗以外の僧侶については、次のような報告が見られる。

彼等はまた、この世において崇拜され尊敬されるために多くのことを俗人達に納得させ、血を有するものは何も食べないと言っています。この理由のために、彼等は公には肉も魚も食べません。もしも国王がこのことを知ったならば、彼は直ちに彼等から僧院を取り上げて彼等を罰するために、彼等はそれらを公に食べることはしません。

しかし、彼等は隠れて食べています。彼等はこの他にも非常に多くの「悪い」ことを密に、また公然と行なっています。¹⁷

「彼等」とは、宣教師たちが見ていた禅宗や法華宗など一向宗以外の僧侶たちのことである。当時の僧侶は、公には肉食をひかえ妻帯をひかえていたのである。熱心なカトリック信者であるイエズス会宣教師としては、おそらくこれら他宗の僧侶の方が、宗教者としてはより親しみを持つことができるものであったと思われる。「しかし、彼等は隠れて食べています。」とあるように、そのような持戒行為が当時純潔に保たれていたわけではないようであるが、肉食妻帯が公にはひかえられており、そのような僧侶としての態度が、民衆の尊敬につながっていたことが報告される

のである。それに対して公然と妻帯し、また罪悪を侵しても罪と認めない僧侶達の信仰形態、ましてそのような宗教者を尊敬して止まない民衆の信仰は、まさに驚きとともに邪悪と語られるものであったのである。

キリスト教思想では、人間の「罪」ということは神学の中心をなす大きな問題としてある。キリスト教の聖典は、伝統的に『旧約聖書』および『新約聖書』と呼ばれるが、その「旧約」「新約」の「約」とは、神と人間との間の、救済の「契約」、「約束」のことを表す。キリスト教の神は、唯一絶対の存在であり、全知全能の存在である。『旧約聖書』の「創世記」によれば、人間とは神によって創造され支配される被造物であり、「創造主に従って歩み、その全き者となること」で神との契約を結ぶ存在である。その契約を遵守するのが、人間の務めである。しかし、この契約関係のなかに現れたのが「罪」の問題である。人間は神との契約を一方的に破り、罪人として神から離れて生きるようになったのである。人間は、その自由な意志によって、神の意志に背き、神の愛に逆らって生きるようになったのである。そこにキリスト教における罪人としての人間観が起ってくるのである。神との契約の前に人間が立たせられるとき、そこに明らかになるのは、神との契約を一方的に破る、罪人としての人間である。そこで、罪人は悔い改めが要求され、それによって神との関係を回復し、神によって「義」とされることを目指さなければならない。ここにキリスト教の人間観と、罪に対する認識の基本があるのである。このような信仰を基礎として持つ宣教師達にとって、「罪悪をおかせどもこれを罪と認めない」一向宗は、まさに驚きなのである。

このように宣教師達を驚かせた、一向宗の罪悪に対する認識ではあるが、しかしこれは単に、宣教師達が当初報告するように、文字通りの愚かさを象徴するものではなかったと考えられる。キリシタン宣教師達は、悔い改めることがなければ、地獄に堕ちると信じていた。そのようなキリシタンにとって、悪を省みることのない一向宗とは、無知であり、まさに「最も厭むべき」「非常に邪悪な」存在だったのであろう。しかし一向宗は、親鸞や蓮如の思想により、「罪悪」は、宗教的自覚における重要な役割を持つ認識であったのである。それは宣教師達とはおよそ異なった

罪認識である。キリスト教において人間の罪を言うのに対し、一向宗でも「罪深き浅ましき身」を言う。しかし、前者はそれを悔い改めることを説き、後者は悔い改めを求めないことが信仰の主眼としてあったのである。「罪悪をおかせどもこれを罪と認めず」という一向宗徒の罪に対する態度を、当時の神学的文脈からではなく、親鸞の思想、あるいは蓮如の言葉に照らしあわせるならば、これこそが親鸞が強調し蓮如が主張した真宗の思想の具体的展開であると見るができるものである。それは宣教師達の来日当初の予測、つまり一向宗は無知であるから、改宗させるのは容易であるという予測が外れたことによっても証明されることである。もし宣教師達の見たとおり、一向宗徒が文字通りの無知であるならば、彼らは容易に一向宗徒を改宗させることができたであろう。しかし、一向宗は、彼らの予測通りに改宗しなかった。むしろ一向宗は、最も改宗させにくい教団として、彼らにとってはまさに「最大の障害」だったのである。これは、一向宗徒の「邪悪」「極悪」な信仰形態が、実は深く信仰に支えられたものであったことを逆に証明することになるものと思われる。

篤信の老婆

信仰を堅く保つ一向宗の様子について伝える次のような記事もある。一人の老婆を巡って起こった事件であるが、当時の一向宗の信仰共同体の様子を窺うことができる貴重な史料であると思われる。

そこで次のようなことが起こった。彼らの中に一人の老婆がおり、仏の熱心な崇拜者であった。その地方が（キリシタン宗門に）改宗した時期には仏（像）を隠していたが、迫害を機にふたたび仏（像）を公然と家に置き、これを崇める多くの男女を呼び集めていた。こうして同地の住民がことごとく墮落していった。その時、我らの伝道者である一人の同宿（教会の若者であり教理を説いている）が同地を訪れようとしていたが、その出来事を耳にしたので老婆の家に行き、彼女から仏（像）を取り上げた。それを見た老婆は仏（像）を返すようにと大声

を上げたが、同宿は応じることなく、それを携えて或るキリシタンの家に赴いた。すぐさま、百二十を超え人々が武器を手にその家へやってきて大いに騒ぎ立て、ホトケすなわち仏像を老婆に返さねば皆殺しに言った。善良な若者の同宿は、それを返すよりもむしろ死ぬ覚悟を決め、大いなる勇氣をもって人々の前に出ると彼らに応じて次のように述べた。^④

これは、先にも引いた九州天草の志岐の出来事である。志岐では、キリシタンの繁栄に対する仏教徒の反撃もあったと伝えられている。そのキリシタンへの迫害がはじまったとき、一時は改宗していた様子であった老婆が、公然と自分の家に仏像を置き、多くの一向宗徒を集めはじめたと言われるのである。つまり老婆は、一時は隠していた本尊を、公然と家のなかに置き、そこを道場にしてしまったのである。老婆だけではなく、その道場には、多くの人たちが集まってきた。「同地の住民がことごとく墮落していった」とある。宣教師の言葉では「墮落」と言われるが、これは同地の住民達が、老婆の行動をきっかけとして次々と一向宗徒としての信仰を回復していったことを伝えるものである。宣教師たちにとっては、まさに「墮落」と報告せざるを得ない出来事である。

もちろんその場合、キリシタン教会側も、そのような行動を許さず、老婆から本尊を取り上げ、キリシタンの家へ持ち去ってしまったと言われる。ところがすぐさま、老婆の同信の人たち百二十人が、武器を手にそのキリシタンの家へ赴き、本尊を老婆に返すように迫ったのである。

この報告では、その後説得を受けて、老婆を除く一向宗徒が再びキリシタン信仰へと翻ったと言われている。彼ら一向宗徒たちのうちどれほどの人が、一向宗としての信仰を捨て、真のキリシタンとなっていたのかはわからないが、一度キリシタンとしての洗礼を受けた者が、老婆への弾圧に抵抗して武器を持って集まったことは、老婆を中心とした当時の道場の姿がよくうかがわれるものと考えられる。

先の高槻での報告では、一向宗の人を「(キリシタン)信仰の弱い者」と言い、とりわけ「かつて一向宗(の信徒)

であつた人々が（キリシタン）信仰に動揺をきたすと言つてゐる。ここでは一向宗徒が「ことごとく墮落していった」と言われる。これらキリシタンの立場に立つた言葉を、一向宗の立場に逆転させるならば、キリシタンへの改宗が押し進められるなかにあつても、一向宗徒の信仰は、かなり強く人びとの心に刻みつけられていたことが明らかになる。これらの表現を逆転するならば、一向宗徒は、一向宗徒としての信仰を堅く保ち、一向宗徒としての信仰に動揺をきたさず、墮落していかない人としてキリシタン宣教師達の前に存在したのである。

篤信の乳母

また、一人の乳母にまつわる次のような興味深い報告もある。

一人の貴人は己が屋敷に、都の地方にある播磨の国出身の女を己が息子の乳母として置いていた。彼女は一向宗に属し、ひどく阿弥陀を信心し、キリシタン宗門とその礼拝と宗儀を非常に呪つていた。それゆえ彼女は或る人々からキリシタンになるようにと言われた時、勇敢にこう答えた。デウスと阿弥陀の間に差違はない、と。そして彼女はこう言つた。なぜならもしデウスが無限であるなら阿弥陀も無限である。またもしデウスには初めも終りもないなら、阿弥陀についても同様であることを認める。またさらにデウスが、人々の救済のために多くの苦しみを味わつたのが真であるなら、阿弥陀もまた同じ目的のために、何千年も非常にひどく辛い罰を償つたのである。それゆえ自分は、こんなに尊崇してゐて、そのために自分のすべての勤めを奉仕しようと思つてゐる阿弥陀への礼拝を棄てなければならず、そして異国の新しい法を守らねばならぬ理由は見あたらない、と。

しかし、この女は賢明さで有名であつたので、一同はこう主張してゐた。もし彼女が福音の説教を聞くように導くことができるならば、彼女は議論するまでもなく、きつとキリストの教会に近づくようになるだろう。また彼女は自分の模範によつて有名であるために、他の多数の人々を（教会へ）引き寄せるであろう、と。こうして

ついに彼女の心を動かすことがデウスの(の御旨)にかなない、デウスの説教に耳を傾けさせることをデウスは望み給うた。^⑭

彼女は最終的にはキリシタンへと改宗していったことになっているが、宣教師達と、阿弥陀とデウスについてかなり質の高い論議をし、宣教師達を驚かせている。「阿弥陀が無限である」とは、光明無量・寿命無量にまつわる議論であろうか。また阿弥陀が何千年もひどく辛い罰を償ったとは、法蔵菩薩の不可思議兆載永劫の修行についての議論であるとも考えられる。一乳母が、高い神学的教養を持つ宣教師達と対等に論議したことは、彼女の日常の信仰生活の様子をうかがわせるものである。宣教師達は、彼女を改宗させることができるならば、他の多くの人が教会にやってくると言っている。これも先の老婆同様、彼女を中心とした道場、もしくは講演活動があったことを想像させる記事である。阿弥陀の無量について、あるいは特に法蔵菩薩の永劫の修行については『五帖御文』にも詳しく語られるところである。乳母は、日常の講演活動において、これらを学んだのであろうか。

老婆の報告と乳母の記事は、キリシタン文書の性格上、キリスト教への改宗の成果を伝えることが主眼となっている。しかし、宣教師達はそこで、一向宗徒の信仰の深さに驚きつつ報告し、特に乳母の記事では、その教学的知識の深さに驚いている様子である。両記事共に、女性の篤信者についての報告であり、さらに彼女たちを中心とする講らしき集まりがあったことを伝えている。偶然であるのか、あるいは一向宗徒の活動の典型的スタイルとして、宣教師達の印象に残ったものであるのか定かではないが、これらは、当時の一向宗の教団像を明らかにする興味深い記事であると思われる。

ともかく、はじめにキリシタン達が持った印象、つまり「これらの人びとは甚だ無知です。そして彼らのその無知と彼らが信じている誤謬のために、彼らを論破することは容易です」という予測は、全くはずれていたのである。はじめは庶民・農民を中心とした愚かな集団であると思われる一方向が、実に強い信仰に支えられた教団であるこ

とが語られてくるのである。はじめの印象を語る報告から、老婆等の報告書までは、およそ五十年ほどが経過しているが、その間彼らには、一向宗に対する印象が大きく変わっていったのである。

おわりに

イエズス会の積極的な教化の活動は、カトリック教会の信仰復興運動であるが、それはルターによる宗教改革に大きな刺激を受けるものであった。そのイエズス会宣教師達は、一向宗を、ルターに似た教団であるとも報告している。この宗派はルーテルの宗派に似て、救われるためには阿弥陀仏の名を称えるだけでよい。その行によって己を救おうとすることは阿弥陀を侮辱するもので、ただ阿弥陀の功德だけをたよりとすべきであると説いている。²⁴

これは彼らが当初みた無知で罪悪を恐れない一向宗が、実は、深く信仰に支えられた教団であったことを示すものであると考えられる。両者に類似性を見出すのは、その信仰形態と信仰保持の純潔性に起因するものであると考えられる。「阿弥陀仏の名を称えるだけでよい」、「その行によって己を救おうとする」とは阿弥陀を侮辱するものであって」とは、親鸞においては如来回向の思想、蓮如においては「もろもろの雑行をすてて、うたがいがなく一心一向に阿弥陀仏をたのみたてまつる」(聖典八三八頁)という言葉を想起させるものである。宣教師たちはこのような態度に「信仰のみがあらゆる行いなしに人を義とし、自由にし、救う²⁵」というルターの信仰への鋭角的選びに共通する純潔なものを見出したのであろう。

親鸞以降覚如を境として、急速に真宗は教団化の道を進み、親鸞思想の誤解と改変を繰り返したと服部・山折は言う。しかし、教団化は、単なる思想の誤解と改変ではない。顕如を頂点とする石山本願寺の権力や激しい一揆など、確かにキリシタン世紀の本願寺には、親鸞思想や蓮如の『御文』などと直結するとは考えられにくい姿も多くある。しかし、それらの影に、一向宗徒の熱心な信仰共同体としての姿は、これまで隠されてきたのではないか。先の老婆

や乳母など、キリシタン文書を見るならば、そこに強く信仰を選び取っている個人と、そして共同体の姿が映し出されている。それは、「二宗の繁昌」が、「一人にても信心をとる」ことだと言った蓮如の、没後五〇年の真宗教団の姿だったのである。

宗教思想と信仰共同体の関係について、今後さまざまな視点からの考察が必要であると思われるが、宗教思想は、そこに集まる人を生む限り教団という形を取らざるを得ないのではないだろうか。教団化は、思想の改変であるのではなく、思想の現実化である。そこにおいて当然、さまざまな現実的事柄が付随してくるものと考えられるが、それらは決して思想の誤解ではなく、思想の歴史化であるのであろう。

- ① 岩島忠彦『キリストの教会を問う―現代カトリック教会論―』中央出版 五七頁より重引。
- ② 『蓮如』福村出版二五頁
- ③ 『人間蓮如』洋泉社 一五五六頁
- ④ 『ザビエル全書簡』三卷・九六頁
- ⑤ 『日本巡察記』五頁
- ⑥ 『イエズス会日本報告集』Ⅲ・五【20】
- ⑦ 『イエズス会日本報告集』Ⅲ・五【23】
- ⑧ 『ルイス・フロイス』日本史』1 中央公論【27】
- ⑨ 『イエズス会日本報告集』Ⅲ・六【29】
- ⑩ 『イエズス会日本書翰集』訳文編之一【1】
- ⑪ 同左
- ⑫ 『イエズス会日本報告集』I・三 フェルナン・ゲレイロ編『日本諸国記』【51】
- ⑬ 『耶穌会士日本通信』下・三七三―三七四頁 ジョアン・フランシスコ書簡【19】
- ⑭ フロイス『日本史』五・二〇二―二〇三頁【38】

- ⑮ 『耶穌会士日本通信』上【4】
- ⑯ 『耶穌会士日本通信』上【10】
- ⑰ 『イエズス会日本書翰集』訳文編之二【1】
- ⑱ 『イエズス会日本報告集』I・三 フェルナン・グレイロ編『日本諸国記』【51】
- ⑲ 『イエズス会日本報告集』I・二【45】
- ⑳ 『耶穌会士書翰集』『長崎県史』史料編 第三【14】
- ㉑ 徳善義和訳『キリスト者の自由』一〇八頁